

私、中野梓は今大変困っています。率直に言うとピンチってやつです。

その理由はといえば、まあ全て私のせいなんですけど。

朝からそわそわしつつこちらをちらちら見てくる唯先輩に、今日何かあったかなと日付を確認したら11月27日

「あ、今日は唯先輩の誕生日じゃないですか」

と言ってしまったわけです。もちろんそれを聞いた先輩はあっという間に膨れっ面。ええ、本当に迂闊としか言い様が無いです。

今まで忘れてたのとぶんぶん怒って、現在は唯先輩の部屋で二人家族会議状態。家族じゃないだろという突っ込みは全力でスルーです。いいじゃないですか、そのうちそうなる予定なんですから。

そうですね、海沿いの小さいけどかわいい白い家に二人で住んで、あ、もちろん防音設備付きのスタジオも完備したいですね。そして猫も飼うんです。もちろん名前はあずにゃん3号。そして二人と一匹、いつまでも幸せに暮らすんですよ。

と、ストロベリーショートケーキより甘い未来予想図に浸ってる場合じゃありませんでした。何とか唯先輩の機嫌を直さないで、折角の誕生日、唯先輩には笑顔で過ごして欲しいです。

言い訳になりますけど、忘れていたわけじゃないんですよ。大体、私が唯先輩の誕生日を忘れるはず無いじゃないですか。その11月27日という日はそれこそ魂レベルで何よりも大切な日と私に刻み込まれているわけですから。だって、唯先輩が生まれた日ですよ。その日があったからこそ、私は先輩と出会えて、今こうして一緒にいることができるんです。それはもう、宇宙開闢の瞬間と並べるほどの重要事項ですよ。

だけど、そうですね、このところの私はなんだかんだで沢山の用事を抱え込まされていて、その上嫌がらせのように次から次へと追加が来るもんだから、すっかり曜日と日にち感覚をなくして、その結果、何よりも大切なその日が今日であることをすっかりと失念させられていたってわけです。これは私と唯先輩の仲を割こうとする、国家レベルの陰謀に違いありません、とかあらぬ妄想をしてしまうほどです。まあ、仮にそんな組織がもし存在するとしたら、悪魔に魂を売り渡してでも叩き潰しますけどね。

っと、とりあえずその辺りは全ておいておかないと、思考に没頭している場合じゃないです。お願いですから、機嫌直してください、唯先輩。

「やだもん」

けんもほろろとはこのことです。さっきからいくら言い訳を重ねても、先輩は頬を膨らませたその表情のまま、こちらを向いてくれません。

自分でも言い訳だってわかってますから、仕方がないとは思いますが、唯先輩はきっと自分の誕生日に私が何をしてくれるか、ずっと楽しみにしていたに違いありません。それを、私が裏切ってしまったと言う事実は確かなんですから。たとえどんな理由を並べたところで、それを帳消しにするなんて出来ようはずが無いです。

唯先輩は頬を膨らませて、つーんとそっぽをむいたまま視線すらあわせてくれません。そんな唯先輩もかわいくて、思わず脳内画像フォルダに万単位で保存しちゃったりしてます。

だけど、笑顔の方がずっといいですから。唯先輩には笑顔でいて欲しいと思いますから。だから、こういう顔にさせてしまった自分が今とても憎らしくて仕方ありません。もし先輩の部屋の机の引き出しにタイムマシンがあったとしたら、即座にあの迂闊な発言をする直前の自分をフルボッコしに行ったところです。

まあ、そんなものは当然あるわけありませんから、私は覆水盆に帰らずをまさに体現した状態と心境に陥っているんですけど。

ああもう、そんな後悔とかは置いておかないと、今は唯先輩を笑顔にできるように尽力すべきです。

「え、ええと、プレゼント何がいいですか？」

とりあえずモノで釣ろう計画発動です！

「……まだ用意してくれて無かったんだね」

逆効果でした。だけど、ここで引き下がるわけには行きません。

「ゆ、唯先輩の欲しいもの、なんでも用意しますから！」

そう、今の私ならなんでもできます。唯先輩が望むのなら、神様にだってけんかを売ってきますよ。チェーンソーなんて無くたって平気です。

だから、機嫌を直してください。いつものふんわりした笑顔に戻ってください。そっぽを向く先輩もかわいいとは思いますが、だけど、こんなに長い間先輩から目を逸らされているとやっぱり寂しいです。寂しくて悲しくて、今にも泣いちゃいそうですから。

「……なんでも？」

「なんでもです！」

食いついてきた、と私は内心キラーンと目を輝かせます。

「ホントに何でもいいの？」

くるりところらを向く唯先輩。唯先輩の眼差しにとくんと私の胸は高鳴ります。いつものふんわりした視線じゃなくて、少し眉が下げられた怒った眼差しだけど、だけど、なんかいいです。ゾクゾク来ます。新たな性癖を開発されそうな、そんな予感が　　って、まあ自重しますけどね。とりあえず、妄想に耽ってる場合じゃないですから。

「もちろんですよ」

「そっかあ……」

そういうと、先輩はあっさりいつものふわりとした笑顔に戻りました。丁度90度私から逸らしていた体の角度を、真正面真っ直ぐに戻ってきます。そのままの勢いで、とんと私の両肩を捕まえて、上機嫌な笑顔なんて見せてくれたりしています。

へ？と私は思わず戸惑うしかありません。いえ、元々それを目指していたわけですから、願ったり叶ったりなことではあるんですけど、何で急に、こんなあっさりと治ってしまうんですか。それに、どことなく上機嫌な先輩の笑顔はいつものようで、いつもと違うような　　でも、確かに見覚えがあるもののように見えます。

それが何かと考え始めた私は、結局はその答えが見つからないまま、ぼすんという音に思考を遮られてしまいました。まあ、結果オーライということでもいいんですけど、何はともあれ先輩に笑顔が戻ったわけですし。

にしても、今のぼすんと言う音はなんでしょうね。例えるなら、羽根布団の上に身を放り投げたようなそんな音でしたけど、あれ、そういえば、いつの間にか視界が変わってますね。私の視線は何故か天井を向いていて、眼前には丁度照明が逆光の形になり影を指された先輩の顔があります。なんだろうと身をよじって周りを伺おうとしたら、私の両手は手首のところできゅっと先輩につかまわれていました。両脚も唯先輩の両脚で巧みにホールドされていて、一定以上は動かさそうにないですね。視線だけ動かしてその範囲で状況を確認した結果、つまり私はいつの間にかベッドに横たわっていて、その上には唯先輩という状態ですか。

えっと、あれ？

これはつまり、私、押し倒されてるってこと？

状況が把握できずにぐるぐる混乱する頭を抱える私に、先輩はにんまりした笑顔を見せてくれました。

「じゃあ、あずにゃんがいいな」

更にはそんなことを言うてくる唯先輩。

私はというとそのにんまりに、さっき思ったいつもの唯先輩の笑顔とどこか違うなと思ったのはこの要素を含んでいたからなんだとぼんと内心手を打ったりして、丁度その分拍をあけて、なんですと状態に陥っていた。

「あずにゃんがたべたい」

それはもちろん性的な意味でですよ、というかそうじゃなかったら途端にジャンル変わっちゃいますけど。

ええと、じゃなくて、なんでこんな状態に陥っているわけですか。私にも心の準備というものが必要なんですよ、ええ。だってこんなにいきなりだと、私の心臓がパンクしちゃいます。ホントに殺す気ですか。

「何でもいいって、言ったよね？」

ひょっとして、というかひょっとしなくてもこれは凶られたということですよ、私がそういうのを待ってて、怒った振りをしていたと、何処からそうだったかはわからないけど、今は確実にそうですよね。

向けられているのは、艶かしさをたたえたつつ私を見下ろしてくる先輩の瞳。そう、覚えがあるのも当たり前です。それは、「そのとき」に見せてくれる、先輩の眼差しですから。

ふいふーんうまくいったよって、にんまりと笑ってる口元。そこはちょっとムカッと来ますけど、ああもうずるい。結局私はそんな悪巧みを知ってしまった今でも、それを咎めることなんて出来そうにないです。まあ、あれですよ。どうせこれはあげるつもりでしたから、ちょっと順番が変わっちゃったな、ってことでオーライといえばそうですけど。ああもう、悔しさすら浮べる余裕ないじゃないですか。先輩のその眼差しは、けっこうあっさり私のスイッチに手をかけてしまうんですよ。

硬直していた体から力を抜いて、びっくりして乱れていた呼吸は整えて、それでもいつもより少し上気気味に維持したまま、そして高鳴る鼓動はそのまま走らせたままに。

「もう、しょうがないですね……唯先輩は」

表情だけはその言葉どおりに少し呆れた風に形作って、それでも眼差しだけは素直な自分の気持ちを含めて、唯先輩を見上げて見せました。

「へへーしょうがないんだよ、私は」

「自慢げに言わないでください」

先輩がふふんと胸を張った際に、するりと両手を先輩の手から抜き出して、そのままきゅっと背中
に手を回し抱きつきます。私の上15センチの位置で上体を支えていた唯先輩は、突然加わった私
の重みに耐え切れず、丁度私に引き寄せられる形でぼすんとベッドに倒れこんできます。その重み
を預けられた私はきゅっとベッドに押し付けられて、押し返すマットレスのスプリングはぎゅっと
強く私を先輩に押し付けてくれて、そして一瞬の動作に少しだけびっくりとしていた唯先輩は、す
ぐに私とマットの間に腕を差し込んで、お返しとばかりにきゅうっと抱きしめてくれて、
それはいつもとは違う、この瞬間だけの深い深いハグです。いつものきゅうっと可愛がる為のそれ
じゃなくて、私たちだけの、愛を確かめ合うための　　って改めていうとちょっと照れがはいりま
すけど。

「あずにゃん……」

「いいですよ、唯先輩……食べちゃってください」

吐息混じりに私の名を呼ぶ先輩に、私もほぼ同じ声色でそう返す。うん、我ながら今のは色っぽ
かったかも、先輩ほどじゃないですけど。

唯先輩はきゅっとする腕を少しだけ緩めて、少しだけ顔を上げて、唇が触れ合いそうな距離で私と
目を合わせてくれました。ああ、触れ合いそう、じゃないですか、もうすぐ触れ合う距離で、と言った
方が正確かもしれませんね。

ゆっくりと、その僅かな距離をゼロにしようと近付いてくる唯先輩。その距離に比例するかのよう
に、私の体を巡る熱はどんどんその温度を上げていきます。それに焦がされるままに意識はくっ
と切り替えられていき、もう準備は万端。あとはそれにスイッチを切り替えるだけ。
私の唇が柔らかな感触に包まれるその寸前、小さく笑って目を閉じると、私はいつもの中野梓とい
う衣をするりと脱ぎ捨てました。

「いくらなんでも調子に乗りすぎです！」

「うう、ごめんよう……」

そんな言葉を交わしつつ、私はというとベッドの傍で仁王立ち。唯先輩はというとベッドの上で
ちょこんと正座。見ての通り、所謂説教モード、というやつです。

あ、仁王立ちと言ってもさすがに最低限は着衣を戻していますよ。絵的にアレですし、さすがにそ
んな趣味はないです。唯先輩がしたいというなら大歓迎ですけど。
って、話がそれました。今の私は説教モードなんですから。

「何回したと思ってるんですか！」

「ええと…ひいふうみい…」

「指折り数えないでくださいっ」

「あずにゃんが聞いたんじゃん……」

……ああ、実際は何回、じゃすみませんね。両手で足りなくなっって折り返しはじめた唯先輩を見て、
私は溜息をつきます。そうですね、十何回というべきでしたか。まったく、これは耐久レースか何か
ですかとか変に冷静な自分が召還されちゃったりしてましたよ、もう。

別に、悪くは無かったんですけど、ね。

「でもあずにゃんもよさそうだったしい……」

ええ、おっしゃるとおりです。はあ、というよりはなんだかんだで私もこの回数に至るまで抜け出
せなかったと言うことですから。説教しておいてなんですけど、唯先輩だけが悪いというわけでは
ないんですよ。

「まあ、それは認めますけど」

「でしょ！」

かといって折れると先輩は調子付いちゃいますから、ってもう口にしちゃってましたよ。
ぱあっと表情を輝かせた唯先輩は、あっさり正座を解いてきゅうっと私に抱きついてきました。
唯先輩はやっぱりずるいです。そうすれば、私があっさり懐柔されてしまうことを知っているくせ
に、もう、私は不機嫌なんですよ、今。ああもう、もう少し位はしゅんとして下さい。

はあ、まあいいんですけどね。怒ったところで何も始まりませんから。

何度目かの溜息をつきつつ、ちらりと唯先輩の部屋の壁時計に目をやります。時計の針はぐるりと
回っていて、短針はというと最後に私がそれを確認したときからゆうに数字三分は移動していま
す。つまりは、その時点から少なくとも三時間は経過しているということです。

確かに、怒ってる場合じゃないですね。過ぎたことはもう仕方がないとしても、こうしている間に
もまた刻一刻と残り時間は減っています。いくら特別な日だと言っても、唯先輩の誕生日と呼べる
日はやはり二十四時間しかないんですから。ちゃんと有意義に、そして楽しく過ごさないと……だ
から、先輩にあんな顔させたままなのはやはりダメですね。もう怒るのは中止です。

まあ、先輩にきゅーっとされているうちに、もうとっくにそんな気分は抜けてしまっているんですけど、さすがですよ、唯先輩。

「ほら、唯先輩、早く着替えて出かけましょう」

最大限の名残を残しつつ、くいと先輩を引き剥がして一言、ええ、本当はもっとくっついていたいんですけど、このままじゃ着替えられませんし、そんな私に、唯先輩はきょとんと首を傾げて見せた。

「ほえ？どこに？」

「プレゼントを買いに、ですよ」

「え？今たっぶりもらったよ？」

……まあそうなんですけどね、意識を通常モードに戻している今、そんなことをあっさりと言わると本気で照れちゃいますから止めてください。

「もう、あれじゃプレゼントにならないですから、ちゃんとしたものをあげたいんです」

「ええーそうかなあ……私はあれで大満足！だったんですけど？」

まだ言いますか、そりゃまあ、確かに私の方も大満足ではありましたが、ね、ただ、あれでプレゼントと思われてしまうのはどうかな、というか無しです。だって、別に、そう、こんな特別な日じゃなくたって、私はずっと唯先輩のものなんですから。

「あずにゃん……！」

って、唯先輩、なんでそんなに顔を輝かせて……ってというか、にじり寄ってきてるんですか。

「とうっ！」

「わ、ちょ、やめ…！」

私はその気配を感じて回避行動を取る前に、先輩はがっしと私を捕獲するとそのままベッドに倒れこんでしまいました。当然捕獲された私は再びベッドと先輩の間にサンドイッチ状態です。

「あずにゃんがかわい過ぎることというから悪いんだよ…！かわい過ぎるのが悪いんだからね…！」

そんなことを口走りながら、先輩はそのまま全力で私をぎゅーっとしてくれています。ええと、これ全部私のせいなんですか。っていつかさすがに今は痛かったですよ。まあ、そういわれるのは悪い気はしませんけど。

ああ、いつかさっきの、私は口に出していたと言うことですか、……なんて迂闊なんですか、私。恥ずかしすぎるにも程がありますよ。穴があったら地殻貫通するくらいまで掘り進めてマントル付近に身を潜めてしまいたい心境です。

まあ、ですよ、それなら納得です。先輩がこうなっちゃうのも無理ないですか。私がもし逆の立場だったら、自分を抑え切れていた自信なんて欠片もありませんからね。なんて冷静に考えている場合じゃないです。こうなった先輩がなかなか元に戻らないのもよくわかってるんですけど、でも今は何とかしないとイケませんから。

だって、折角の先輩の誕生日ですよ。後から振り返ってずっとベッドの上でした、なんて盛りついた猫みたいなメモリーはちょっとアレ過ぎます。絶対後で凹みます。間違いありません。

ちゃんとお出かけして、二人で色々見て回ったりして、お茶したりして、一緒に素敵なプレゼントを選んだりして、そんなデート的なこともちゃんとしたいです。今日は、一年に一度だけの唯先輩の誕生日なんですから。

「だ、駄目です！早く着替え……むぐっ！？」

ただ、抗議を上げようとする口はあっさりとおふさがれて、そのままぎゅーっと抱きしめられてしまいます。まずいです、こうされると私は、ああもう、唯先輩、ずるすぎです。こんなの、反則ですよ。

ぎゅーっと抱きしめる腕は、徐々に強引さを増していき、気がつけば折角着なおした服は枕元に放られていて、それすらも知覚できないくらいに私の意識はとろんとさせられていて。

「いいよね……あずにゃん？」

なんて台詞に、こくと頷くことしか出来なくなっていました。

結局唯先輩が私を解放してくれたのは、もう窓の外が真っ暗になったころ。時計なんてもう見るまでも無く、夜ですよ、という時間に違いありません。

もう起き上がる気力も無いですよ。ですから、毛布に包まったままの説教モードです。

「私調子に乗るなといいましたよね？調子に乗るなといいましたよね？」

「めんぼくないです……」

ええそりゃもう二回言い直しちゃいますよ。

ぷんぷんというオーラを発してあげると、唯先輩はしょんぼりと大人しく説教を聞いてくれてい

まず、初めからそう大人しくしてくれればいいのに、もう。
「はあ、もう怒ってる時間ももったいないです。早く支度して、でかけましょう」

「そ、そうだね……」

さすがの唯先輩も、今度はさっさと支度に取り掛かってくれました。この様子なら、ようやく出かけられそうです。

それじゃ私も支度しないとですね。そう思って毛布を跳ね除けて、服に手を伸ばそうと状態をあげようとして

「……あれ？」

動きません。いや、動けません。というか、腰に力が入りません。この状態は、ええ、確か今まで何度か陥ったことがありますね。まさか、こんなタイミングでこうなるとは思いませんでしたけど。まあ、ここに至る経緯を考えれば、無理の無いことというか、当全の結果ともいえるわけですが、

「どうしたの？あずにゃん」

そんな私に、その元凶たる唯先輩がきょとんと無邪気な顔で覗き込んできたりしてくれました。

あ、今ちょっとカチンと来ましたよ。

「腰が抜けてます」

「へ？」

「ですから、腰が抜けて立てません」

「え、ええと……」

「ですから、出かけられそうにないですね」

「そ、そうなんだ」

「ええ、そうです」

「それって私のせいかなー……なんて」

頬っぺたにたたりと冷や汗を流しつつ乾いた笑いを浮べる唯先輩。その肩を、かしっと動く両腕で捕獲してあげます。

「わかってるじゃないですか」

そのままきゅっと抱え込んで、体重を預けると、丁度前傾姿勢で私を覗き込んでいた唯先輩は呆気なく私の上に倒れこんできました。ひゃあ、なんて情けない悲鳴を上げてくれたけど、離してなんてあげません。

「あ、あずにゃん、怒ってる…？」

「いいえ、怒ってなんていませんよ。だけど……」

「だ、だけど？」

「唯先輩にも同じ目にあってももらわないと、フェアじゃないですよ？」

「はうう…！？」

もがいても無駄ですよ。腰以外はちゃんと動くんですから。それに、先輩だけじゃなくて、私だって唯先輩の弱いところはもう全部わかってるんですからね。ここをこうして、こうすれば

「にゃ、にゃう……」

ほら、へなりと力が抜けて、食べごろの唯先輩の出来上がりです。あとは逃げられないようにしっかり抱え込んで、と。

「ふふ、普段あずにゃんあずにゃん言ってるくせに、今は唯先輩のほう猫っぽいですね。ゆいにゃんとでも呼んであげましょうか」

「にゃあう……あずにゃん、意地悪だよ」

もう、全く、何を言ってるんですか。本当に意地悪するのはこれからですよ、唯先輩。

ふふ、わかってるくせに

時計の針の音だけが響く室内、私たちは並んで仰向けにベッドに横たわったまま、ぼんやりと天井を眺めています。

「もう、立てません」

まさにぐったりという形容が相応しい様相でベッドに身を沈めてる唯先輩。

「奇遇ですね、私もです」

そしてそれと全く同じ様相で、ベッドに身を沈めている私。

「あずにゃんやりすぎ」

「唯先輩にだけは言われたくないですね」

まあ、確かに私もそう思いますけど。少し調子に乗りすぎました。でも、さっきまでのことを考えればお互い様というやつですよ。しかし、このままじゃ本当にずっとベッドの上で過ごしてました状態になってしまいますか。

「あずにゃん、まだ怒ってる？」

少しだけ、不安そうな唯先輩の声。
「そうですねー...まあ、かわいい唯先輩をいっぱい見せてもらったことですし」

「うう.....もう」

私の言葉に、先輩は照れてぶいっと顔だけ私の反対側へ向けました。さっきは先輩の方からあんなことやあんなことをしてきたくせに、この人は攻められると結構弱いんですね。そこがまたかわいいところなんですけど、攻めても受けに回ってもかわいいなんて、本当にずるい人だと思いますよ。

「あとは.....」

無理矢理力を込めて、寝転がった体をくいと反転させると、私はそっと先輩に寄り添います。びっくりしてまたひょいっとこちらに顔を向けた唯先輩のその肩口辺りに、甘えるように頭をこすり付けてあげます。

「腕枕でもしてもらえれば、許してあげますよ」

続けられた私の言葉に先輩は一瞬きょとんとした気配をうかべ、だけどすぐにふわりとそれを和ませてくれました。するりと私の下に腕が差し入れられ、私はそれが通れるだけの隙間を身を浮かせて作り、丁度私の首の下にそれが収まるのを確認してから、また体を預けます。

「ふふ、やっぱりあずにゃんはかわいいねえ」

そう言って、先輩もくるりと体を反転させると、空いているほうの腕できゅっと私を抱き寄せて、丁度私を抱え込むような形に体勢を変化させました。それは、事後 というとなんかちょっとアレですけどまあ、眠りに落ちるときの、いつもの私たちの形です。

「唯先輩は、あったかいです」

もう既に知ってることですし、何度も思い知らされたことでもありますけど、やっぱりそれに包まれるたびにそう思ってしまうですね。本当にこの人はあったかいです。ふわふわして、柔らかくて、優しく。私をどんどん好きにさせてしまいます。

「えへへ、これじゃすっかり寝誕生日だね」

「まったくです.....でも」

「ん？」

「幸せですよ、唯先輩」

「.....私もだよ、あずにゃん」

本当に幸せ。そして向けられた先輩の笑顔も、本当に幸せだよって私に教えてくれています。だから、私は更に幸せになれちゃうんです。そうです。結局は、この特別な日を先輩と一緒に過ごせて、唯先輩と幸せだってことを確認し合えさえすれば、私はそれでよかったんですから。

だから、こういう誕生日もありだと思います。唯先輩らしい、と言えそうですし、叶えたかったことはまだいっぱいあって、それは結局保留になってしまいましたけど、幸い明日からは週末ですから、ちょこっと一日くらいお祝いを延長してしまえばいいだけの話です。幸せな時間は、長い方がいいですからね。

尤も、明日も結局ベッドから出られませんでした、なんて事態は勘弁ですけどね。ちょっといいかも、と思ってしまったのはきっと気のせいですが、ええ。

(終わり)

■ なんだ神か..... G J !! -- (名無しさん) 2009-11-29 13:15:12

■ 鼻血がとまらない、どうしてくれるんだ。 -- (名無しさん) 2010-02-12 16:17:59

■ 梓の語りがいいな -- (名無しさん) 2010-07-29 09:39:35

■ シーン -- (名無しさん) 2010-08-08 22:45:39

■ シーンが全てカット.....だと.....? -- (途中で書き込んでしまった) 2010-08-08 22:46:58

名前:

感想/コメント:

投稿

[すべてのコメントを見る](#)